

問題づくり

学年	教材	検討内容
6年 H学級	「帰り道」	<p>この物語は、登場人物の「律」と「周也」の視点に立って書かれている。前回は「律」を中心人物として問題づくりをしたが、今回は㊸段落の「周也」の気持ちや様子に着目し、その段落には逆接を使った表現も多いことから、この㊸段落から「周也」を中心人物として問題づくりができるのではないかと気づくことができた。今後も教材解釈、問題づくり、実践を積み上げていきたい。</p>
4年 I学級	「白いぼうし」	<p>「これは、レモンのおいですか？」から「あまりうれしかったので、いちばん大きいのを、この車にのせてきたのですよ。」の部分までの問題づくりを行った。「この車にのせてきたのですよ」を中心問題とした時、その部分がいかに“変だ、おかしい”ことであるかを子どもたちに気づかせるかが大切である。そのためには、もぎたての夏みかんがレモンのような強烈なおいのものであることや、それをタクシーに乗せることのおかしさについてイメージさせることが必要である。</p> <p>「この車にのせてきた」原因となる「あまりうれしかったので」の部分では、何がうれしかったのかについて考えた。その前の松井さんの会話文に着目し、「もぎたて」「におい」「おふくろ」「速達」のどれに対してうれしかったのかについて考えた。松井さんのところに届くはずのないにおいまで届けようとするおふくろの意図や願いがあり、そのことに対して松井さんはうれしかったということに改めて気づくことができた。</p> <p>また、問題づくりを子どもたちと行い、たくさん問題ができたとしても、子どもは全ての問題を並列に見ているので、教師がその問題同士の関係を見極め、軽重をつけて、どの問題をどういう順で扱うのかという構成を考えることが大切である。例えば、中心問題とする「この車にのせてきた」ことがどれほど奇妙なことなのかを際立たせるような問題（「これは、レモン・・・」の「これ」とは何か、など）をとりあげるなど、よほどおかしいというイメージを膨らませることができなければ、中心問題に取り組む追求意欲、エネルギーは持続できない。問題と問題の関係を考えながら、授業を作っていきたい。</p>